

地域教育力の活性化と生涯学習 —駄菓子屋合校の試みと可能性—

鈴木 廣 志

(栃木県教育委員会下都賀教育事務所)

【要旨】

本稿は、平成13年から栃木県が家庭や地域の教育力の活性化を目指し、様々な世代がふれあい・交流しあう「ふれあい学習」を推進する中で取組んだ実践である。

かつて、地域の子どもたちの生活に根付き、社会教育の場として成立していた駄菓子屋。この駄菓子屋のもつ教育力に着目し、大人の学習（ワークショップ）による気づきを通して、集会所・公民館・コミュニティ・学校などで、駄菓子屋合校を開設した。その結果、大人と子ども、子ども同士、大人同士がふれあい、交流しあう場となった。特に、大人が子どもたちに係わることの楽しさや自分の経験や智恵を子どもたちに伝えることの意味を考える有効な機会となり、地域づくりやまちづくりの可能性が広がった。課題として、大人が日常的に子どもに係わるしくみづくりや、子どもの地域文化への参加・参画にどうつなげていけるかなどが挙げられる。

1. 研究のねらい

かつて、地域の子どもたちの生活に根付き、地域の社会教育の場として成立していた駄菓子屋。その不思議な魅力と教育力に着目し、それらの調査分析を試みた。それらの分析をもとに、駄菓子屋合校を開設し、地域・公民館・学校・団体などで以下のような実践を試みた。ここではそれを受けた形で、地域の教育力の活性化に、現代の駄菓子屋合校がどのような役割をはたしうるのか、その教育的意義を考察し、地域の教育力を活性化させ、生涯学習の成果を生かした地域づくりやまちづくりの可能性を探ってみたい。

2. 駄菓子屋の歴史とその地域教育力

(1) 地域における駄菓子屋の変遷とその思い出

駄菓子屋は、「江戸時代の番太郎店」が原型。番太郎とは、町や村の防災・警察・治安を管理した木戸番のこと。彼らの副業として、荒物屋を開き、一文菓子を並べたのが始まりとされる。⁽¹⁾ここでは、本稿の実践事例の地域である栃木市における駄菓子屋の変遷を調べ、各世代からの聞き取り調査によって、駄菓子屋の思い出や魅力を探ってみた。

まず、栃木市（旧栃木町）は、江戸時代から、巴波川の舟運で栄えた商人の町であり、現在も蔵づくりの街並みを保存し、街づくりに活かされている。⁽²⁾明治期の『栃木県営業便覧』⁽³⁾によると、昔ながらの廻船問屋・卸問屋が軒を連ねる中で、「菓子小売」の小さな店の記録が残されている。詳細を調べると、52軒の菓子小売業のうち、19軒は女性店

主の名前・つじ・路地に位置し店主が女性であることがわかった。栃木市においても、子ども相手の菓子小売業は、当時の女性のすぐに関ける生業であったことが想像できる。

大正期・昭和期の詳細は、別の機会で明らかにしてみたい。そして、現在、栃木市内で、昔ながらの駄菓子を扱う一軒店は10軒程度を残すのみである。

(2) 駄菓子屋の思い出とその魅力(109名のアンケートと聞き取りによる調査)⁽⁴⁾

栃木市在住の小学生から成人まで、様々な世代の人たちから、質問紙法により「駄菓子屋の体験とその思い出」に関するアンケートと聞き取りによる調査を実施した。表1「駄菓子屋の思い出に関するアンケート」は、その結果の抜粋である。ここでは、次のような3つの点が特徴として明らかになった。

- ①ほとんどの世代で、駄菓子屋の経験を持ち、駄菓子屋の多くは、学校や神社、公園など自宅の近くにあり、子どもの生活圏に立地している。
- ②駄菓子屋は、その名前を店のおばあちゃんや屋号・愛称で記憶していて、その記憶は鮮明に残っている。
- ③駄菓子屋の思い出は、「駄菓子やくじに関するもの」「駄菓子屋での大人との関係」「駄菓子屋を基点にした友達との関係」が中心で、なつかしさとプラスの体験として語られることが多い。

表1 「駄菓子屋の思い出に関するアンケート」(抜粋)

<駄菓子屋の経験>ある 98% ない2% (コンビニ・いってほだめ)	
<立地場所> 学校・神社・公園・家の近くが91%	
<名前> すずめや・ねーちゃんち・みっちゃんち・ブタキン・一番堰・加瀬君矢部さん・臼井さん・かつえちゃん・なかよし・木村・おみやさんむねさん・じじばばデパート・おことさん・たがみ・亀ちゃんち	
<思い出・魅力>	
・おいしい甘い砂糖の味が忘れられない	70代男
・遅くまで遊んでいて、家の手伝いを忘れて家に入れてもらえなかった	70代女
・お店のおばちゃんとの会話が楽しかった	60代男
・みんなでわいわい楽しんでかえるところが魅力	50代女
・当たりくじを引くのが楽しみだったが、あまり当たった記憶がない	50代男
・上級生や他校生と鉄板でもんじゃやカルメ焼きをやって仲良くなった	40代女
・子どもの夢がいっぱい詰まっていた子どもたちの社交場	40代男
・子どもを遊ばせながら、世の中の決まりややさしさを教えられた	40代女
・少ない小遣いで、いろんな種類のお菓子が自分で選べる	30代女
・みんなが群れて遊べたことや社会のルールを学んだ	30代男
・親代わりで見守ってくれた	30代女
・どきどきわくわくしてしまう不思議な空間	30代男
・こどもの小遣いで買えて、自分で好きなモノが選べる	20代女
・くじが当たるとうれしくなった	20代女
・お店のおばちゃんと仲良くなった	20代男
・そこに行けば、必ず誰か友達と会える。	20代男
・おばちゃんがおまけしてくれた	10代男
・自分の好きなモノをいろいろ選べる	小学生女
・消費税がついていないからうれしい	小学生女
・友達とゆっくりしゃべれるところ	小学生女
・スーパーやデパートでは無いものが売っている	小学生男
・お父さんお母さんが子どもの頃のお菓子が置いてある	小学生女
・なごめる・くじがあたる・近くの公園で遊べる	小学生男

(3) 現代駄菓子屋事情

最近、昭和30年代をテーマとした商品の復活やテレビやアニメの再放送などが盛んである。駄菓子屋においても同様である。デパートやスーパーで駄菓子が販売されるようになると、かつての駄菓子屋を再現した大手の駄菓子屋メーカーが出店、さらには、東京や横浜などではアミューズメントセンターやイベント会場の一角に開店する駄菓子屋が誕生している。そこで、現代の駄菓子屋事情について、①地域の一軒店②デパートの中の駄菓子屋店③アミューズメントの中の駄菓子屋④川越菓子屋横丁等での駄菓子屋事情を、店主や顧客から聞き取り、観察調査によって、かつて地域にあった駄菓子屋と現代の駄菓子屋とを比較検討し、駄菓子屋の現状を考察した。

①地域の一軒店（10軒の一軒店での観察・聞き取り）

- ・おばちゃん店が中心。20年から40年続いている店。顔見知りの関係。（親子孫3代の顔なじみも。）学校そば・公園そば・路地・神社のそばに立地。文房具・焼きそば・もんじゃを扱う。ゲーム機を設置する店もある。時に、生徒指導のチェック場所に。客層は圧倒的に、小学生3～6年生。店主は、子どもが好き。高額のお金では売らない。「子どもを励ます・話を聞く」「喫煙・けんか・万引き」許さない。
- ・一日20人から60人相手。一日平均5千円から1万円売り上げ。携帯電話をかけながらの子どもが気になる。塾途中の子・買い物で1分で済ませる子どもの姿が印象的。

②デパート内(栃木県内大型店での観察・聞き取り)

- ・平成14年にオープン。大型資本を背景に、昭和30年代の懐かしさをテーマに。若者を対象に、駄菓子をバスケットで買う。販売しているものは駄菓子でも、売り方は他の商品と同じ。消費税あり。バーコードは使わない。店員はアルバイトの若い女性中心。客層は、午前中主婦、つまみを購入。午後は高校生が学校帰りに寄り道。土日は若いカップル・親子連れ・祖父母と孫。同じフロアにゲームセンターが設置。一日300人から500人相手。計算が苦手な子・叱らない親・高額な人形を買う親会話のない子の姿がみられた。
- ・幅広い世代の客に喜んでもらえる努力・工夫(親子連れの買い物コミュニケーション)駄菓子セット200円など注文販売あり(子ども会・敬老会・遠足で人気)

③アミューズメント内（東京都内の大型テーマパーク内駄菓子屋での観察・聞き取り）

- ・平成8年にオープン。複合施設として、ゲームやテーマパークで楽しみがら、昭和30年代の町並みを再現。テーマはレトロ・エモーショナルデ・ザ・ビュー。30代の駄菓子屋大好き少年だった店長・アルバイトの若い女の子。全ての種類(約1000種)の値段を覚えレジを打つ技能・子どもよりもかつてよく駄菓子屋に通った大人達をターゲットに展開。子どもだった頃への回帰(癒し系ビジネス)・気楽さ・安さ・懐かしさ
- ・客層は、若いカップル・親子連れ・祖父母と子ども連れ多い。バスケットで購入。ありがとうのいえない子・ほしがらない子・懐かしがる子・大金を持ち歩く子・叱らない親・買う物を決めたがる親・せかす親・子どもに懐かしさを説明する親の姿が印象的。
- ・一日500人から1,000人相手。集まった客を相手にベーゴマ道場を開催

④川越菓子屋横町

- ・江戸中期、寺門前に2・3軒の菓子屋が始まり。菓子職人鈴木藤左衛門が芋菓子、麦こがし・団子類を製造販売。暖簾分けによって店を持つ菓子屋が増加。大正12年関東大震災で、東京の菓子問屋が打撃を受け、東京への集荷が盛んに。昭和初期70軒を超える店。現在、22軒の手作り菓子・飴菓子等を製造販売し、菓子屋横丁会を作る。近年テレビ・マスコミで取り上げられ、小江戸川越の町並みの重要な観光スポットに。「古き良き風情」「ノスタルジックな散歩道」「昔ながらの懐かしい味」などで売り出す。平日、休日を問わず、老若男女でにぎわう。菓子作りの実演や商品を軒先にだしての客とのやりとり、路上でのアメ細工の実演などライブ感覚。
- ・地域の子どもたちは、あまりみられず。買い物体験ツアー・生活科・総合的な学習で訪れる子どもたちも多い。

以上の観察・聞き取りの結果をまとめると、表2のような特徴が明らかになった。

表2 <4つのタイプの駄菓子屋の比較>

	地域の一軒店	デパート店	アミューズ店	菓子屋横町店
①店 主	おばあちゃん (60～70代)	企業の社員 若いアルバイト	駄菓子屋大好き 青年	職人気質の店主
②立 地	学校・公園 神社・路地等	デパート内 インターそば	・繁華街 ・駅のそば	路地
③営業時間	特になし子どもが いる時間	10:00～ 21:00	10:00～ 22:00	9:00～ 17:00
④客層	・子ども中心 ・親子2代	・午前中主婦 ・午後高校生 ・土日若いカッ プル・親子連れ	・若いカップル ・親子づれ・祖 父母と孫・30 ～40代男代	・観光客 ・学校の授業で
⑤子どもとの 関係	顔見知り	商売のお客	商売の客・顔見 知り	観光客・顔見知 り
⑥広がり	・～して遊ぶ ・作って食べる ・群れて遊ぶ	・ゲームセンタ ー ・ショッピング	・アトラクショ ン ・テーマパーク ・ベーゴマ道場	・町並みの観光
⑦考 察	・子どもたちの中 に認知され、頑固 に昔のスタイルを 守っているが、一 代限りの店がほと んど。子ども好き の店主が多い。 地域の教育力とし て機能している。	・幅広い客層で あるが、売って いるものは駄菓 子だが、駄菓子 屋の持つ教育力 はほとんどない。 経営戦略として の駄菓子屋買い 物による親子の コミュニケーション はある。	・テーマパーク とセットで、集 客力は抜群。昭 和30年代を発 信しながらも、 レトロの次の戦 略を模索中。駄 菓子屋を通して のベーゴマ道場 を開催するなど のイベントに工 夫がみられる。	・街の歴史を活 かし、菓子屋横 丁を前面にだし た街づくりは成 功。しかし、地 域の教育力とし ての機能はあま り果たしていな い。学校の生活 科・体験活動の 場としての工夫 がみられる。

(4) 地域の教育力としての駄菓子屋とは

矢野俊や菊地幸子らの「地域の教育力に関する研究」では、地域の教育力を「地域社会の人間形成力」と捉え、その教育力の要素は、①社会規範②生活体験③地域集団として捉えられてきた。⁽⁵⁾そこで、4つのタイプの駄菓子屋を比較検討し、その要素を分析すると、地域の教育力としての駄菓子屋とは、①駄菓子を媒介に、地域の大人と子ども・子ども同士がふれあい、コミュニケーションしあう②遊びや活動を通して、大人や子どもが集団を作る③様々な体験や遊びへの広がりをもつ④集団としてのルールや規範意識をつくるなどの機能を果たしうる駄菓子屋であると考えた。

3. 駄菓子屋合校とは

(1) 駄菓子屋合校とは⁽⁶⁾

前の章で概観したように、私が注目する駄菓子屋の持つ教育力とは、モノの懐かしさだけの店ではなく、昔ながらの駄菓子屋の人間関係のよさ・懐かしさの経験を基に、大人の学習を通して、駄菓子屋を開き、子どもたちと係わる活動のきっかけ作りをさす。すなわち、駄菓子屋合校とは、「駄菓子屋のもつ教育力に着目し、駄菓子屋の出店を通して、子どもたちに係わる地域の大人の役割を自覚し、さまざまな団体や個人が連携・協働しあい、子どもたちとともに学び合い、喜び合える地域づくりにつながる活動」ととらえる。

表3 <駄菓子屋合校との比較>

	江戸の番太郎みせ→	地域の駄菓子屋→	駄菓子屋合校
①店主	番太郎	おばちゃん	地域の大人
②店	荒物屋	駄菓子屋	駄菓子屋+遊び+α
③機能	副業	余生の営み	地域教育力の活性化
④家	番小屋	長屋	屋台
⑤場所	辻	路地裏	どこでも（公民館等）

表3のように、駄菓子屋合校の特徴は、①地域の大人たちが駄菓子屋の学習を基本に、駄菓子屋の持つ教育力に気づく②駄菓子屋の屋台を開くことを通して、子どもたちと直接係り、遊びやプラスαの活動を引き出す③移動式の駄菓子屋として、教育集会所、公民館、学校など駄菓子屋のよさに気づいた大人たちが場所を限定せず自由に開く。④駄菓子屋合校をきっかけに、子どもとの係り方を見直し、地域の教育力を活性化させる等である。

なお、松田道雄氏が提唱し、実践する「だがしや楽校」と本実践は、地域の教育力を活性化させる手だてとして駄菓子屋の持つ教育力に着目し、大人も子どももわくわくする空間や時間を作り出すコンセプトやそのねらいは、共通する部分が大である。また、本実践の過程で、平成15年1月、松田氏の実践と出会い、互いに実践の情報を交換しあってきた経緯がある。特に、松田氏からは、駄菓子屋のもつ教育力について大いに示唆を得た。

しかし、松田氏の提唱する「だがしや楽校」は、公園を中心に「お祭りの『屋台』」の形式で、地域の様々な人たちが特技や遊びや作品をひろうする集い」であり、「ボランティアとベンチャーの共存」⁽⁷⁾であるのに対し、本実践では、①大人の学習（駄菓子屋ワークショップ）を基盤とし、子どもや高齢者の人権学習を重視する②様々な団体と連携・協働する③駄菓子屋の屋台を核とする遊びづくりの活動である④駄菓子屋合校はきっかけ作りであり、各団体・地域の様々な活動やまちづくり・地域づくりへと発展することを意識している点が、本実践の特徴である。

(2) 駄菓子屋ワークショップによる駄菓子屋合校のコンセプトづくり

駄菓子屋合校を開くにあたり、以下のようなワークショップを実施し、参加者が駄菓子屋のよさを共有しあうことから、駄菓子屋合校のコンセプトづくりを始めた。

図1 駄菓子屋ワークショップの流れー駄菓子屋合校を開きましょうー

①駄菓子屋の思い出は何ですか？

- ・小遣い10円をにぎりしめて、買いに行った。
- ・毎日小遣いをもらえなかったので、小遣いをためて駄菓子屋にいった。
- ・駄菓子屋のおばちゃんとよく話をした。叱られたり、相談にのってもらった。

- ・あめ・すもも・黒パン・赤大根・イカ焼き・当たりつきのアイス・・・。
- ・男はおまけ・女は値引きに弱いのは、子どもころの駄菓子屋の影響だと思う。
.....

②駄菓子屋の体験をしましょう

- (1) 駄菓子の説明と駄菓子エピソード
- (2) 現代の駄菓子屋事情と子どもたち
- (3) 昔の遊びを体験しましょう

③駄菓子屋の魅力は・・・？

- (1) 自分の好きなものを選んで買える (2) 安い・うまい・おいしい・楽しい
- (3) そこに行けば、必ず友達がいる (4) 遊び道具を買って仲間とすぐに遊べる
- (5) 一人のお客としてみなされる。(6) わくわくするものが置いてある。
- (7) 駄菓子屋のおばちゃん悪いことをすると叱ってくれた。・・・

④駄菓子屋のもつ教育力は

- (1) 地域の大人から社会のルールを学ぶ (2) 大人とのコミュニケーション能力
- (3) 子ども同士の付き合い方 (4) 金銭感覚・我慢することを学んだ
- (5) みんなで遊ぶことの楽しさ (6) 物を大切にすることを教えられた
- (7) 駄菓子屋は、生きた社会教育の場 (8) やったことを人のせいにならない

⑤駄菓子屋「〇〇」でやりたいことは？

- (1) 駄菓子リクエスト・・・糸あめ・すもも・するめいか
- (2) いろいろなくじを・・・新聞紙で手作りのくじを作る
- (3) 遊びの広場は
①ベーゴマ②めんこ③吹き矢④折り紙⑤お手玉⑥あやとり⑦おはじき
- (4) 折り紙は、地区社協会の皆さんにおり紙を教えてください。
- (5) 紙芝居は、専門の人をお願いします。
- (6) 横丁券を入り口で配り、券がなくなったらおしまい。
- (7) 家にねむっている昔の道具・おもちゃを持ち寄る。

⑥募集方法・係り分担打ち合わせ（後日）

以上のようなワークショップによって、①大人同士のコミュニケーションが図れる②駄菓子屋合校のコンセプトが共有化される③自分たちで楽しみながら駄菓子屋を開く意識が高まる④駄菓子屋の体験を語ることで、地域の教育力・大人の子どもの係り方を想起できるなど、大人として子どもにいかに関わるかの学習の機会を提供できる。駄菓子屋合校の方向性を決めるのは、このワークショップでの大人の学びであるといえよう。

4. 駄菓子屋合校の実践（抜粋）

以上のような参加した大人の学びをきっかけに、(1) 教育集会所・コミュニティ (2) 学校 (3) 公民館 (4) 団体 (5) 人権学習会 (6) まちづくりの場で、様々な駄菓子屋合校の実践が展開された。その概略は次の通りである。

(1) 教育集会所・コミュニティでの実践 (平成14年 7月・10月)

①新栃木コミュニティ会館⁽⁸⁾・第四地区コミュニティセンター

主体	講座生・民生委員	連 携	地区子ども会育成会
内 容	①講座生による常設の駄菓子屋作り・移動式屋台作り ②土曜日のふれあい横丁の開始(七夕・流しそうめん・わら鉄砲づくり) ③夏休みふれあいキャンプ ④タイムスリップ祭の実施(昔遊び・独居老人招待・屋台・茶道体験等)		
成果	・講座生の生涯学習のベクトルが地域の子どもたちに向けられた ・一人暮らしの高齢者のキャンプ参加。久しぶりに子どもの声に感動 ・人権教育への理解が深まり、近所の親子の参加も ・民生委員のベクトルが地域の子どもに向けられた。 ・一人暮らしの高齢者と子どもたちとの交流 ・地域の紙芝居おじさんの発掘(かつて紙芝居を生業としていた)		
課題	・地区内にある中学生をどう巻き込むか ・子どもの居場所としてのコミュニティづくり		

(2) 学校での実践

①栃木第四小学校(平成14年6月～平成15年9月)

主体	YOU遊倶楽部	連携	P T A・読み聞かせの会・学校支援ボランティア
内 容	①P T A親父の会が中心にイベントを企画 ②6月ベーゴマ大会・7月金魚すくい・9月紙飛行機・11月竹とんぼ 12月たこ・1月ニュースポーツ・2月ドッジボール・5月探検ごっこ 7月いかだ競争8月学校キャンプ11月紙飛行機・焼きいもの実施 ③学校の理科・総合的な学習との関連(理科研究・クラブ活動)		
成果	・父親のベクトルが地域の子どもに向けられた。 ・遊びを通して科学する心や眼が育っている ・子ども同士の学びあい・切磋琢磨・異年齢の交流が進む ・地域の人材の発掘(竹とんぼおじさん・たこづくりおじさん)		
課題	・授業への発展性		

(3) 公民館での実践

①吹上地区公民館(平成15年 7月)

主体	子ども会育成会	連携	吹上地区民生委員協議会・地区老人会・りんごの会
内 容	①子ども会育成会指導者による駄菓子屋作り ②駄菓子屋いぶき屋の実施(昔遊び・屋台・紙芝居) ③昔の道具の展示会		
成果	・子ども会育成会の指導者が活躍・活性化 ・民生委員のベクトルが地域の子どもたちに向けられた。 ・子どもの頃の幼なじみのベーゴマ対決の再現 ・子どもたちの昔遊びへの関心(おもちゃ博物館見学) ・地域の竹とんぼおじさんの発掘(公民館の新しい顔)		
課題	・地区内の中学生をどう巻き込むか		

(4) 団体での実践

①青年会議所 (平成15年8月)

主体	栃木青年会議所	連携	栃木市民生委員協議会・りんごの会・信用金庫・家庭教育オピニオン・宇都宮大学・市役所児童福祉課
内容	①栃木青年会議所のメンバーによる駄菓子屋合校作り ②世代間交流ふれあい広場の開催(昔遊び・屋台・紙芝居) ③少子高齢化フォーラム・ふれあい祭りの開催		
成果	・30代の青年層が活躍し、青年会議所のベクトルが地域の子どもたちに向けられた。 ・少子高齢化への関心→少子化フォーラムの開催(10月) ・街づくりへの関心→街づくりシンポ・ふれあい祭り参加(11月) ・街づくりへの提案・コーディネート役割を果たすきっかけに。		
課題	・継続性・計画性のある取り組み		

(5) 駄菓子屋合校と人権学習

①子どもの人権を考える駄菓子屋ワークショップ (平成15年7月)

主体	栃木県教育委員会 下都賀教育事務所	連携	下都賀地区内小中学校 国分寺町教育委員会
内容	①アイスブレイク 「いろいろジャンケン」「駄菓子屋の思い出バスケット」 ②中心活動 「忘れられないあのひと言・あの出来事」 「プレイバックシアター」「信頼の木」 ③振り返り 「子どもの力を信じて」		
成果	・参加者が、自分の子ども時代の駄菓子屋の経験や思い出を振り返り、その教育力に気づくことができた。 ・子どもの人権を尊重するとは子どものよさや可能性に気づき、信頼することであることを共有することができた。 ・教員・地域の指導者らが「子どもの力」を具体的にイメージできた。		
課題	・ワークショップでの気づきを日々の学校生活や地域での子どもの参加にどう生かしていくか。(気づきから行動へ)		

(6) 駄菓子屋合校と街作り(駄菓子屋合校養成講座の実践)

①とちぎ自由大学 とちぎ路地裏文化考⁽⁹⁾ (平成15年11月～平成16年4月)

主体	とちぎ自由大学	連携	おもちゃ博物館 小山市立博物館 りんごの会
内容	①路地裏文化考Ⅰ『駄菓子屋の歴史とその魅力』－現代駄菓子屋事情－ ②路地裏文化考Ⅱ『昭和の子どもと遊び』－ベーゴマ道場の挑戦－ ③路地裏文化考Ⅲ『おもちゃ・おまけの文化』 ④路地裏文化考Ⅳ『昭和の子どもと暮らし再考』－物売りの声が聴こえる－ ⑤路地裏文化考Ⅴ『紙芝居・大道芸の魅力』 ⑥路地裏文化考Ⅵ『駄菓子屋合校を開きましょう』		
成果	・参加者が、自分の子ども時代の駄菓子屋の経験や思い出を振り返り、栃木市の路地裏の文化を見直すきっかけとなっている。 ・定年後、子どもたちに係わりたい考えている高齢者や土日、子どもを巻き		

	込んだ事業を始めている親父、余生を駄菓子屋で過ごしたい老夫婦・街の活性化として駄菓子屋事業に取り組もうとしている青年実業家などが受講。 ・駄菓子屋から昭和の文化の見直し街作りのヒントを探る講座が展開中。
課題	・講座の回数を重ねながら、子どもたちに係わる地域の大人を増やし、子どもたちを巻き込んだ地域作りのコンセプトとアイデアをどう提案できるか。

5. 駄菓子屋合校の教育力とその可能性の考察

さまざまな駄菓子屋合校の実践から、駄菓子屋合校のもつ教育力を明らかにするとともに、駄菓子屋合校の要素を分析し、今後の地域作り、街作りへの可能性を考察したい。

- (1) 駄菓子屋合校の試みは、大人も子どももワクワクドキドキする体験の場を提供し、大人が子ども時代を懐かしみ、子どもたちに積極的に係わる触媒となるとともに、世代間の交流の触媒として、高齢者の「安らぎ感」と子どもたちの「活動性・エネルギー」がお互いを励まし合う効果が生まれる。
- (2) 保育園児から80代の高齢者まで、「懐かしさ」と「目新しさ」が、世代を超えて楽しむことができるとともに、大人と子ども・子ども同士・大人同士のコミュニケーション・つきあい方を学ぶことができる。また、子どもたちにとって、食べて遊ぶ・当てて遊ぶ・作って遊ぶ・群れて遊ぶなど「～して遊ぶ」という経験の連続性が生まれる。
- (3) 自分の趣味に親しむ生涯学習の高齢者や仕事中心の父親たちが、かつての地域のよさを思い出し、自分たちが楽しみながら子どもに気楽に係わることができ、大人が子どもに、地域の文化や遊びを伝えるきっかけになる。
- (4) 高齢者は、子どもたちに自分の経験を伝えることで、特別な経験や知識をもたない人たちも、子どもに係わり、役立ち感を覚えることで自信を持ち、子どもへの働きかけを強めたり、子どもと顔見知りになることで、日常的なつながりや次の係わりを持つようとする。子どもたちも、高齢者に対して、好感をもって接するきっかけとなった。
- (5) 社会のルール・決まり・マナーを教え学びあう場を提供する。特に、金銭感覚、我慢すること・分け合うこと・悪いことを叱られる関係づくりが芽生える。子どもにとって、小さな消費社会・善悪の免疫力・抵抗力の体験の場となる。
- (6) 「競争原理・評価される関係・生産性、効率性重視」の考え方から、「ともに過ごす・過程を楽しむ・顔が見える人肌の関係・スローライフ」の価値観への見直しを提案する。
- (7) 様々な世代が駄菓子屋合校を通じて、連携・協働しあい、駄菓子屋合校作りの過程で、多くの協力者を得て、地域にねむっている人材を発掘するなど、地域の教育資源を見直し、地域の教育力を活性化させることができる。

6. 成果と今後の課題

駄菓子屋合校の実践からの地域教育力を活性化させるための方策とこれからの課題を明らかにしたい。

- (1) 地域の教育力を、地域社会の連帯感の希薄さや社会規範の問題・地域の大人の参加の在り方を問題からとらえるのではなく、駄菓子屋という日本の歴史的な子ども店の遊びや文化を媒介に、子どもの係わる大人の参加と仲間作りと地域づくりの活動としてとらえたことで、多くの世代を巻き込み、地域の大人の自覚を促すことができた。

その結果として、様々な子どもと係わる実践への動機付けやエネルギーへとつなげることができた。

- (2) 地域の教育力は、子どもに係わる大人の文化的な参加（かつての地域の伝統や文化）を媒介として行うことで、大人の自覚を促し、文化を伝え、共有し合う関係づくりが生まれる。特に、懐かしさのもつ教育力とは、子ども時代の遊びのもつ楽しさ・おもしろさ・いきいき・ワクワク・ドキドキ・ハラハラの体験（アニマシオン）を、どのように子どもとの交流活動に生かすかを考えることが重要である。その方策の一つとして、駄菓子屋ワークショップなど、大人の学習による気づきとコンセプト作りは有効な活動である。
- (3) 地域の教育力を地域づくり・街づくりに生かすためには、顔見知りの関係から日常的な温かな関係づくりを目指すことが重要である。一部の大人だけが一時的に係わる関係から、地域の普通の大人たちの子どもたちに対する何気ないひと言や、継続的係わり、温かな眼差し・見守ることこそが地域教育力の原点である。地域の子どもの参加・参画を、遊びや子ども文化の視点から街づくり・地域づくりの在り方を改めて見直すことで、地域教育力の活性化につながる。
- (4) 子どもの人権・高齢者の人権を尊重することの意味は、その人の持つ自分らしさを十分に発揮し、係わりあいの中で必要感・役立ち感を味わうことであることを確認できた。趣味やカルチャーなどの生涯学習を続ける高齢者の視線を、地域の子どものための教育に向けさせる仕掛け・ツールが地域福祉・保育の関係からも、今後ますます必要となる。その一つとしての駄菓子屋合校の挑戦は、子どもと高齢者の対等な関係を引き出し、世代間交流を進めることができる場である。
- (5) 単に、駄菓子屋文化を消費するのではなく、大人と子どもがコミュニケーションしあい、交流や摩擦によって、大人が子どもに文化を語り、子どもが大人にしみ込む文化の意味を受け止めるところにこそ、地域教育力の意味が出てくる。その意味で、駄菓子屋合校の挑戦は始まったばかりであり、今後は、地域の教育力を子どもたちによる地域文化への参加・参画につなげながら、実践・検証していくことが課題である。

注記・引用文献

- (1) 松田道雄『駄菓子屋楽校』新評論、2002、pp.40-43.
- (2) 栃木市は、栃木県の南部に位置し、幕末から明治年間には、日光例幣使街道の宿場町として、巴波川の舟運により、商人町として栄え、見世蔵や土蔵が軒を連ねる。
- (3) 田口波三編『栃木県営業便覧』全国営業便覧発行所、明治 40、pp.1-61 を参照し、菓子小物業を確認した。
- (4) 調査は、平成 15 年 7 月～9 月、質問紙法を用い、本論拙者が直接聞き取りを交えて、公民館・コミュニティ・学校等で実施。（109 名から回答）
- (5) 菊池幸子編『地域教育力と生涯学習』多賀出版、1995、pp.15-17.
- (6) 経済同友会が提唱した「合校」の新しい学校のコンセプトを踏まえ、大人も子ども互いに学び合い、様々な関係を築き合う場や地域や街づくりに広げる活動と捉えた。
- (7) 松田道雄『だがしや楽校のスルメ』創童舎、2003、pp.26-28.
- (8) 概要は、平成14、7.8付「下野新聞」朝刊、同7.11付「下野新聞」朝刊に掲載。
- (9) とちぎ自由大学は、まちづくりの市民団体「ネットワークとちぎ」が主催する民間の生涯学習の場である。文部科学省『マナビー』ぎょうせい、2004.2、p.44-45.